



明治二十年前後の文学の陰影－立身出世主義をめぐって－

西村, 英津子

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2014-03-25

(Date of Publication)

2015-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6033号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006033>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

明治二十年前後の文学の陰影 —— 立身出世主義をめぐる ——

氏名 : 西村 英津子

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 福長 進 教授
(副) 奥村 弘 教授
(副) 田中康二 教授

(博士論文要旨)

博士論文では、明治20年前後の文学作品を、近代化と立身出世主義という角度から読み解き、これまで日本近代文学研究で見落とされてきた作品や、十分に検証されてこなかった側面を検証し、明らかにすることを試みた。

日本の立身出世主義の研究の第一人者と言える竹内洋氏の著作に『学歴貴族の栄光と挫折』というものがあるが、まさに、日本のエリートたちの歴史は、「栄光と挫折」の歴史であったと言えるだろう。なかでも、私が、博士論文執筆にあたって検証してきた文学作品は、「学歴貴族の栄光と挫折」の「栄光」を手にするのではなく「挫折」した者、「栄光」を手に入れたが、その「栄光」に埋没できなかった者、あるいは、立身出世を人生の目標に据えながらも、立身出世の競争原理に組み込まれることさえできなかった者など、「挫折」した人間の物語である。

日本近代文学史において、明治20年前後の文学作品として取り上げられるのは、立身出世と恋愛の狭間で苦悩する「学歴貴族」の物語である。例えば、坪内逍遙『当世書生気質』や森鷗外の『舞姫』は、その代表格であろう。『当世書生気質』や『舞姫』が常に注目されてきた中で、明治文学史の日陰の存在であったのが、例えば硯友社の文学であったと言えるだろう。なかでも、貧者を執拗に描いた広津柳浪などは、正当に評価されてきたとは言えない。

たしかに、近代以降の日本について考えるうえで、立身出世を遂げた人物の果たした役割は言うまでもなく大きい。したがって、評価の是非を問わず、研究や議論の俎上に挙げられてきたことに異論はない。同時に、いわゆる「学歴貴族」のレールにも乗ることさえできなかった社会的弱者や近代社会の価値観や近代システムによってはじき出された人間の物語にも、もっと研究や議論が成されるべきであったのではないかと考えている。昭和文学においては、立身出世コースとは無縁の、社会の底辺を生きる労働者を主題としたプロレタリア文学が登場し、ある一定の文学史的評価を獲得してきたが、明治文学においては、文学史的評価が曖昧で、その文学的意義がまだまだ十分に検討されていない状態に留まったままだと判断している。

本論では、以上のような問題意識から、明治20年前後の文学作品から貧者や女性、犯罪を犯した者、そしていわゆるエリートの抱えていた問題について見ていき、立身出世主義をめぐる同時代の人間の物語を読み解いていった。

その導入として、序章では、「福沢諭吉に見る近代国家像と立身出世主義」と題して、日本近代の幕開けに日本のエリートを育成する礎を創った代表格である福沢諭吉の思想を、主に『学問のすゝめ』と女子教育について書かれている『女大学評論』、『新女大学』を取り上げ、従来の福沢評に疑義を呈しながら、問題提起を試みた。

続いて、各章の要約を述べておきたい。

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

【第一章「仮名垣魯文『高橋阿伝夜叉譚』論——法とジャーナリズムによる犠牲者の物語】

仮名垣魯文『高橋阿伝夜叉譚』は、明治12年前後の最後の戯作ブーム、そして当時流行した毒婦物を代表する作品として知られている。これまでの文学研究では、魯文の本作品そのものは(戯作)、「毒婦物」というカテゴリーで整理されてしまい、また、近年では、フェミニズム批評や国民国家論の導入によって、魯文の描いたお伝像は酷過ぎるということではほぼ評価は一致している。

本章では、まずは作品そのものを丁寧に読み解き、従来の研究では見逃されてきたお伝像を明らかにした。この作業を通して見えてきたのは、魯文の描いたお伝は、決して「毒婦」とは言えないという点である。作者は、お伝を「毒婦」として描く一方で、お伝を運命に抗い、らい病を患った夫を献身的に看病する生き方を丁寧に描いている。このような作品の特徴を、本稿では「語りの二重性」として着目して、この「語りの二重性」を分析することを通して、作品のメタプロットを指摘した。また、博士論文に収録するにあたり、女性の自立という課題と格闘の歴史は、近代以降のもの(日本では『青鞥』登場以降)という従来のフェミニズム研究の定説を疑うべく、幕末から明治初期の動乱期を駆け抜けたお伝の主體的かつ自立して生きようとする姿勢が、作品の底流において貫かれている点についても、考察を加えた。

【第二章 清水紫琴『こわれ指環』から『移民学園』へ — 立身出世主義の枠組みを超え出る女性たち —】

第二章では、清水紫琴の『こわれ指環』(明治二十四年)と、紫琴最後の作品である『移民学園』を中心に検証をおこなった。

『移民学園』は、若く将来を有望視される政治家今尾春衛と、被差別部落出身の才色兼備の妻清子の夫婦を軸に展開される。主人公の清子は、政治家今尾春衛の妻になった後に、自分が被差別部落の出身であることを知り、春衛に離婚を申し出る。しかし、春衛は、清子からの告白を受けて、政治家を辞し、清子と夫婦であり続けることを選択し、今尾夫婦は、全国の不遇な環境に育つ被差別部落の子どもたちを北海道に集め、育てることを決断する。作者がこのような結末を用意した背景には、自由民権運動に参加して、運動の内実が男性の為の民権運動であって、女性の権利というものは家庭の中では尊重されず、顧みられることもなかった現実(つまり、「女権」不在の現実)を目の当たりにし、女性の真の自立と自由の確立を求め続けた紫琴の理想の夫婦像であり、生き方だったと言えるだろう。近代化の中で天賦人權論が謳われながらも、十分に「人權」や「自由」が議論されなかったと言える近代日本の中で、新たな差別の枠組みに入れられてしまった被差別部落の問題に焦点を据えることで、作者は、日本近代が輸入した天賦人權論の欺瞞を指弾し、立身出世主義という新たな競争原理を乗り越えていく可能性を描いた作品として評価した。

【第三章 広津柳浪「女子参政屋中楼」—自由民権運動と女性—】

「女子参政屋中楼」は政治小説の中で「異質」なものという評価がなされ、それぞれの論者が主人公山村敏子の活動と実際の民権運動とを比較したり、山村敏子の内面に注目してそれを柳浪自身と比較検証することに終始してきたと言える。また、先行研究では山村敏子について考察される場合がほとんどで、敏子以外の女性登場人物である櫻田艶子と松山操について、そしてこの三人の女性の関係についてはほとんど触れられていない。しかし、これまで見過ごされてきた艶子や操の存在に注目することで、「屋中楼」のテーマはより鮮明に見えてくる。特に、松山操については敏子を相対化する存在として位置づけることができ、操のあり方を読むことによって明治国家が求めた女性像とそこから超え出て行く女性たちの物語が浮かび上がった。本章では、自由民権運動と女性という問題をテーマに、女子参政権獲得のために人生を駆ける主人公敏子、恋愛において奔放な女性である艶子、そして明治国家が女性に求めた「良妻賢母」像を先取した存在である操を中心に作品を分析した。

【第四章 末広鉄腸『雪中梅』論 —政治青年の野望と庶民への眼差し—】

これまで『雪中梅』に書かれた政治論そのものが批判的に検証されることはなかった。民権運動の理念を題材とした政治小説というだけで、そこで語られる思想は無条件に正しいものとして読まれてきたと言える。政治小説の代表作とされてきた『雪中梅』を文学作品として読み直す試みは、そこで語られた思想が無条件に(正しい)と言えるのかどうかについて問い直すことであり、それは、政治小説から自由民権運動の本質を読み直すということに繋がる。

本章では、まず、主人公野基を下支えするヒロインお春に注目し、お春像を読むことで、『雪中梅』の抱える人物造形の一面性と浅薄さを指摘し、そこから文学性の未熟さと国野基の政治論の限界との関係について明らかにし、その作業を通して本作品に語られた民権思想と物語がどのような関係にあるのか批判的考察を進めた。それによって、自由民権運動家による自由民権運動敗北後の政治論、政治参与の在り方、女性に対する認識の問題を明らかにし、さらには、明治十七年の激化事件以降の自由民権運動家の変節とナショナリズムの問題についても言及した。

【第五章 樋口一葉『やみ夜』論—格差社会の〈闇〉を読む—】

先行の『やみ夜』論は、主人公松川お蘭を「魔性の女」(中川清美)であることを前提にして、お蘭の「魔性」性をめぐってさまざまに検証され、議論されてきた。お蘭の「魔性」性との関係の中で、副主人公と言えるお蘭に惚れ込んだ高木直次郎についても付随的に検証されてきたと言える。つまり、従来の先行研究自体が、お蘭の「魔性」性に重点を置き過ぎ、その結果、高木直次郎や、佐助・おそよという老夫婦についての検証は置き去りにされてきた。したがって、本章では、お蘭の分析とともに、直次郎と佐助・おそよ夫婦に

論文審査の結果の要旨

ついても検証し、この人間関係のなかで、お蘭の人物像を検証し直し、『やみ夜』の基底にある立身出世の問題を、お蘭と直次郎双方が抱えている問題として着目し、その特質について考察を進めた。

【第六章 泉鏡花『龍潭譚』論—エリート青年が抱いた共同体への懐疑】

本章では、主人公の千里の幼児体験において〈母〉がどのような存在であったのかについて考察をおこなったが、特にこの作品が一人称の語りであるということに着目した。二十歳前後に成長した千里自身がなぜ幼児体験をこのとき語らねばならなかったのか、これを現在の千里の原体験として捉え、そこに留意しながら作品分析を試み、母=産みの母という枠組み、つまり、あくまで現実世界での認識における母の「実在」/「不在」を超えて、〈母なるもの〉の意味を拓けて考察を進めた。産みの母を絶対的な存在としてこの作品を読むのでは、限界があることを作品分析を通して指摘した。また、作品最後で突然一人称の語りから三人称の語りになり、千里が「海軍の少尉候補生」となったことが説明されることの意味についても考察を加えた。

【終章 北村透谷の可能性—立身出世主義と文学—】

福沢諭吉の対極にいた文学者として、終章では北村透谷について取り上げた。

透谷は、『内部生命論』で、人生の「根本」を問うことの意味について述べ、生命の本質に触れない生き方では、最終的に「益する」ものは何もないと述べた。その透谷の姿勢は、当時の学生たちを駆り立てていた立身出世とは人生観を異にするものであった。「功利」にばかり価値を見出し、出世することが最大の務めであるかのように錯覚を起こした青年たちは、自らが出世を達成する過程や出世後に、少なからず弱者を切り捨ててきたと言えるだろう。弱者の犠牲があつた立身出世だったことを指摘した。また、写実主義の導入の必要を説いた、逍遙の『小説神髓』が結果的に、文学と政治、思想との間を切断したことによる問題についても、透谷の思想を分析しながら言及した。

| | |
|--|---------------------------|
| 氏名 | 明治二十年前後の文学の陰影—立身出世主義をめぐる— |
| 論文題目 | 西村 英津子 |
| 要 旨 | |
| <p>本論文は、明治二十年前後の七つの文学作品を、近代化と立身出世主義という観点から分析し、今日まで日本近代文学研究の中であまり顧みられることになった側面に光を当てようとする意欲的な研究である。本論文で取り上げられる作品群は、立身出世主義とは無縁の社会的弱者や、近代社会の価値観や近代的システムによって弾き出された人々に照準を当てている。</p> <p>序章「福沢諭吉に見る近代国家像と立身出世主義」は、日本のエリートの育成の礎石を築いた福沢諭吉の『学問のすすめ』や、女子教育のためにのもされた同じく諭吉の『女大学評論』『新女大学』を取り上げて、立身出世主義の功罪を別決する。すなわち諭吉が自由平等を説きながら、江戸時代の身分秩序の温存を図らんとする詐術を見抜くとともに、学問をおさめ一身の独立を実現することがひいては国家の独立をもたらすことを説く相手として想定されていたのは旧士族であったと指摘している。女子教育も良妻賢母となるためのもので、そこには男女平等の理念が入り込む余地はまったくなかったという。立身出世主義が抜き差しならぬ形であらたな差別を生み出す機微を照らし出している。こうして立身出世主義を軸に明治二十年代の時代状況を取り押さえたうえで、各作品を分析していく。そして各作品を文学史の上に正当に位置付けることによって、既存の文学史を書き変えようとする野心的な試みである。以下、各章の概要を記し、若干の論評を付す。</p> <p>第一章は仮名垣魯文『高橋阿伝夜叉譚』を分析する。本作は「戯作」「毒婦物」というカテゴリーに従来、分類されてきたが、論文提出者は、作者が阿伝を「毒婦」として描く一方、運命に抗い、らい病の夫を献身的に看病する生き様を丁寧に描いているとして、「語りの二重性」に着眼して分析するとともに、それがそのまま作家魯文の、前近代と近代のはざまで揺れる心のあり様を表しているとする。</p> <p>第二章は、清水紫琴『こわれ指輪』と『移民学園』を取り上げる。『移民学園』は被差別部落の問題に焦点をあてる結構となっている。自由・平等を唱える天賦人權論の欺瞞性を暴き立て、立身出世主義という新たな競争原理を乗り越えていく可能性を描く本作は、作者紫琴の自由民権運動への参加と挫折によって生まれたとする。</p> <p>第三章は、広津柳浪『女子参政塵中楼』を取り扱う。従来の研究では主人公、山村敏子ばかりが目目されたが、本論では、その他の女性登場人物、櫻田艶子と松山操にも着目し、女性参政権獲得のために人生を賭ける敏子、自由奔放な恋愛を追い求める艶子、良妻賢母像を先取りした存在と見なせる操の三者の関係性を重視して作品分析を行い、本作が、明治国家の求める女性像と、そこから超えていく女性たちの物語として理解されると結論づける。第十七回が、それまで上流階層における女子参政権をめぐる攻防を描いてきたのに対して、突如、下層社会における女性参政権運動が抱える問題に照準を当て、さらに第十八回では敏子がかつて懸念を示していた下層の「劣等婦女子」の暴動を導入している点に注目して、その理由を追究して、女子参政権獲得に奔走し、「正理公道」のもとに人に接してきた敏子に胚胎する下層社会に対する差別意識を炙り出し、敏子の参政権運動の限界を指摘する。そして、敏子の階級的差別意識と関連づけて、友人、操の変節や女子参政権の否決、さらには操の結婚式の馬車に銃弾が撃ち込まれ、死者まで出すことになる陰惨な事件、そのあとの艶子の入水自殺・敏子の失踪という一連の事件を用意して悲劇的結</p> | |
| 主査記載 氏名・印 | 福 長 進 |

末へと向かう展開の理路を明らかにしている。

第四章は、末広鉄腸『雪中梅』を扱う。これまでの研究では見落とされていた主人公、国野基の政治論に着眼して作品分析を行う。基の政治論あるいは政治思想は、上流・中流階層のための政党政治を目指し、下層社会の人々への参政権付与はその目的を阻害させないための配慮でしかなく、さらには下層の人々への教育も無関心であったとし、基の政治論の限界を指摘する。また基を支えるお春にも触れ、基の政治的同調者であり、明治国家体制の論理に抗うところがないだけでなく、それを具現する良妻賢母となることが予見される人物として造型されているとする。それらが『雪中梅』が政治小説としても人情世態小説としても低い評価しか与えられてこなかった理由とする。そして、『雪中梅』は天皇を君主と仰ぐ帝国憲法体制の枠組みに収まり、それを超脱する批判性を内包していないと評定する。

第五章は、樋口一葉『やみ夜』を扱う。『やみ夜』の主人公、松川お蘭は「魔性の女」と、これまでの研究では捉えられ、それを前提として作品論がなされてきた。それに対して、本論文提出者は、お蘭の人物造型を検証し、波崎との結婚をめぐってお蘭は気づかずして立身出世主義にとらわれているとする。また波崎がお蘭を見限ってほかの女性と結婚したことに対して、執念深い上昇志向を孕んだ「怨み」を晴らすための唯一の手段がテロであり、それが容認される背景に、立身出世主義から見放され、社会から弾き出された人々、お蘭・直次郎・佐助夫婦の共同の感情があると捉える。作品の基底に立身出世主義を見据える独自の考察である。

第六章は、泉鏡花『龍潭譚』を論じる。幼少期に神隠しにあり、町の人々のみならず身内からも徹底して疎外された主人公、千里が、成人して海軍の少尉候補生となる筋立てから、小さな共同体から疎外された孤独な人間が自己の存在の意味と他者とのつながりを求めて、より大きな共同体、すなわちこの場合は国家への帰属を志向する現象の具現とみなす。共同体の排除の暴力性を描き出す先には、国家の暴力性が見据えられているとする。千里が国家に奉仕する海軍少尉候補生となっても、それが千里の存在を支えるものではなく、国家の虚妄性を暴き立てることになると論じている。

終章は、北村透谷の『内部生命論』を論じ、立身出世主義の対極に透谷のいう、生命の本質に触れる生き方を見据える。

以上、各論とも立身出世主義の視座からそれぞれの作品を分析する。従前の作品理解を相対化しながら、論文提出者自身が設定した視座からの読みを提示する手際よさは特筆すべきだろう。それぞれの作品を論ずることによって新たな文学史の構築を目指すのであれば、取り上げられている作品相互の関係性についても留意する必要がある。かかる点で物足りなさを感じるが、各論とも完成度が高く、説得的な論述となっている。

以上の論文審査に鑑み、本審査委員会は、論文提出者、西村英津子が博士（文学）の学位を授与されるに足るとの結果に達した。

審査委員

| 区分 | 職名 | 氏名 | 区分 | 職名 | 氏名 |
|----|----|------|----|-----|------|
| 主査 | 教授 | 福長進 | 副査 | 教授 | 田中康二 |
| 副査 | 教授 | 鈴木義和 | 副査 | 准教授 | 樋口大祐 |
| 副査 | 教授 | 奥村弘 | | | |